

カフカの『ある犬の探究』（3）

—断食実験—

佐々木 博 康*

【要 旨】 本稿では、他の犬たちから離れ、茂みの中でひたすら断食する探究犬を、「書くこと」に没頭するカフカの分身であると捉え、探究犬の心境の変化を伝記的事実と照らし合わせた。それによって、カフカが、「書くこと」に専念してきた自分のこれまでの生き方に対して疑念を抱き、それが滑稽な独りよがりすぎなかったのではないかと自問していることが明らかになった。「書くこと」は、「虚栄心と享楽欲」であると断罪され、他者との関係を避け続けてきた自分自身のこれまでの生き方が反省される。

【キーワード】 書くこと 断食芸人 真実 自己享楽

6. 断食実験

食物の探究を続けた探究犬は、ついには自ら断食実験を行うに至る。それは、断食によって「大地（Boden）が食物を斜めに引き降ろしているのではなく、私のほうが食物をおびき寄せているのだということ」（466）を証明するためである。「引きこもって、昼も夜もじっと眼を閉じたまま、食物を拾い上げたりも、またばくついたりもしない」でいると、「呪文を静かに唱え、歌を歌うだけで（……）食物がひとりでに上から降りてきて、大地などそっちのけで、口の中に入れてほしいと私の歯をコツコツと叩く」（466-7）のではないかと空想する。

他の犬たちから離れ、食物に目もくれず、茂みの中でひたすら断食する探究犬は、「書くこと」に没頭するカフカの分身である。探究犬は「完全な断食」（466）をしようとしており、その姿は『断食芸人』後半の、人々から見棄てられた状態で徹底的な断食を延々とする断食芸人と重なる。断食芸人は、物語の終わりで、自分もまた他の人々と同じように食物を求めていたのであり、自分が食べたいと思う食べ物が見つからなかったから断食していたにすぎないことを悟る。断食芸人は結局「未知の糧」¹⁾に到達することなく死ぬが、その目にはなおも、「さらに断食を続けていくんだという信念」²⁾が浮かんでいたとされ、断食し続けること自体は強く肯定されている。では同じく徹底的な断食を敢行する探究犬の場合はどうか。人間の側から見れば、探究犬とは、投げ与える食物にも見向きせず、ひたすら目を閉じたままいて、食物が口に押しつけられるのを待っている犬ということになる。さぞ奇妙な犬に見えることであろう。断食芸人の断食があくまで真剣な行為として描かれていたのに対して、探究犬の断食は、「口の中に

平成 28 年 10 月 31 日受理

* ささき・ひろやす 大分大学教育学部言語教育講座（ドイツ文学）

入れてほしいと私の歯をコツコツと叩く」という表現が示すように、滑稽化されており、また独りよがりなところがある。断食芸人の場合とは異なり、探究犬の断食はパロディ化されているのである。カフカは、「書くこと」に没頭する自分を、『断食芸人』の場合には真摯な目で、『探究』の場合には距離を取ってアイロニカルに見ている。つまり、「書くこと」に没頭してきた自分の人生に対して疑念を抱き、それが滑稽な独りよがりすぎなかったのではないかと問うているのである。

以下、断食実験を行う探究犬の心境の変化をたどりながら、カフカの伝記的事実と照らし合わせることで、断食と「書くこと」の類似点を見ていこう。

断食実験の開始に当たって探究犬は、「時間を慎重に分割し、たくさん眠りはするが、いつもほんの短い時間ずつとするように決めた」(468)という。これは、カフカが「軍事演習」と呼んでいた、「書くこと」に集中するときに実施した独自の生活規則のことを思い出させる。

僕は数日前から「軍務 (Kriegsdienst)」を開始しました。もっと正確に言えば、「軍事演習 (Manöver)」生活です。それは僕が何年も前に、僕にとってとりあえずもっともよい生活だということがわかった生活です。午後にはできる限りベッドで眠り、それから二時間散歩、その後はできる限り目を覚ましているというものです。³⁾

仕事から帰ると仮眠し、散歩した後は、眠くなるまでの可能な限りの時間を執筆に捧げる。文学的感興に浸されたときには、カフカはそのような生活を送ったのである。

また、探究犬は自分の実験に絶対的な自信を持っているが、そのことは、「書くこと」に対する自分の能力へのカフカの確信と一致している。

(……) 私は食物を降下させる能力を自ら持っていたし、実際に降下させてみようと思ったのだった。だから犬族の助けなど必要なかったし、それどころかそれを決然とはねつけたのだった。(467)

自分の能力を確信する探究犬は、他者の「助け」を徹底的に拒む。独力で偉大な業績を達成するのだと頑なな態度を示す。「書くこと」に対するカフカの自信の一例として、27歳のカフカが、神智学で有名なルドルフ・シュタイナーに語った言葉を挙げよう。1911年3月28日の日記に再現されているものである。

そしてここ(=文学の領域)では、私はもちろん、あの状態を経験しました(多くはありませんが)。それは、私の考えでは、先生(=シュタイナー)、あなたがお書きになっておられる透視的な状態に非常に近いものです。その状態においては私には次々と着想が浮かびましたし、またそれを形にしました。⁴⁾

「透視的な状態に非常に近い」状態とは、文学的インスピレーションが次々にあふれ出る状態のことである。憑かれたような状態になると、どんな着想でも形にすることができる、つまり、何でも思うように書くことができると述べている。

同じような状態のことは、同年10月2日の日記でも言及している。

僕は、特に夕方頃、そして朝にはもっと多いのだが、ある息吹を感じる。それは、偉大な開放状態に近いもので、僕をどんなことでもできるようにしてくれる。しかしそれから、僕の内部にありながら、余裕をもってどうこうすることのできないありきたちの騒音 (allgemeinen Lärm) が聞こえてきて、安らかさ (Ruhe) を失ってしまう。結局、この騒音は圧迫され、押さえつけられたハーモニー (Harmonie) にすぎない。それが解き放たれたら、僕を完全に満たしてくれるだろう。それどころかもっと大きくふくれあがり、僕を満たしてくれることもあるだろう。⁵⁾

カフカは、「偉大な開放状態」を感じる時、全能感を覚えるという。「騒音」が聞こえてきて邪魔をするが、その奥にある「ハーモニー」を解放することができるなら、自分をもっと大きな存在感に満たされるだろうと述べている。現実生活に対する無能感とは逆に、文学の領域におけるカフカの自信は限りない。なお、ここで「騒音 (Lärm)」とその奥にある「ハーモニー (Harmonie)」という比喻は、音楽犬たちのパフォーマンスから感じた「騒音」とそのかなたから響いてくる魅惑的な「旋律 (Melodie)」と酷似していることに注意しておこう。これが書かれているのは、カフカがレーヴィらのイディッシュ語劇——音楽犬たちのパフォーマンスのモデル——を初めて見る三日前のことである。

さて、絶対的な自信を持って断食実験を始めた探究犬の心境はどのように変わっていくだろうか。

(……) 私はとりあえずは、これまで一度も感じたことがないほど安らか (ruhig) だった。(……) 私を満たしていたのは、心地よさ (Behagen) であり、よく言われるような学究の徒を感じる安らかさ (Ruhe) と言ってもいいものだった。(469)

探究犬がまず感じるのは、「心地よさ」であり、「安らかさ」である。思う存分断食することができることに対するこのような満足感、カフカが、『探究』執筆の二カ月前に、長年勤めた労働者災害保険局を病気のため退職し、十分な執筆時間を得た喜びを反映しているだろう。

探究犬はまた、実験の成功のあかつきに得られるであろう社会的榮譽を夢想する。

私は大いなる榮譽で迎え入れられるだろう。これまで憧れ求めてきた、たくさんの犬たちの体のぬくもりが私を取り囲むだろう。私は声高に賞賛され、わが民族の肩車に乗って揺れるだろう。(469)

探究犬の妄想は歯止めを失い、英雄へと祀り上げられる自分を思い描くまでになっている。そして、このような幻想に耽っているうちに、まだ達成されてもいない「自分の業績がとても偉大なものに思われ」(469) てきて、感動のあまり涙を流しさえする。

世間からの賞賛を求めるのは、『断食芸人』の主人公も同じである。断食芸人は、自分を雇ってくれたサーカスの人々に、「今こそ世間をあっと言わせてみせる」と豪語する。これまで誰も成し遂げなかったような断食記録を達成しさえすればよいのではなく、人々の評価、自分の業績に対する賞賛が必要なのである。

断食芸人や探究犬がカフカの分身であるとしても、彼らが求める世間からの榮譽に関しては現実のカフカと一致しないと思われるかもしれない。カフカは作品をなかなか発表したがらず、特に初期においては、プロットが、カフカが書いたものを無理やり発表させたことはよく知られている⁶⁾。しかし、これをもってカフカが控え目な人間であり、作家としての世俗的榮譽などは眼中になかったとは言えないだろう。むしろ、野心を持っているからこそ、自分にとって本当に納得できる作品が生まれるまで発表を拒むことがありうるはずである。断食芸人や探究犬に見られる世間の榮譽への渴望は、明らかに誇張され滑稽化されているとはいえ、苦いアイロニーとともに描かれたカフカ自身の文学的成功への野心の表現であるとはごく自然なことである。

やがて断食が苦しくなってくる。すると「父祖たち (Urväter)」(471)による断食の禁令をめぐる議論を思い出す。探究犬は断食をやめる口実を求めるようになるのである。しかし、「さらに断食を続けることへと誘惑するもの」もあり、断食を継続する。ついには、「極上の食物」であり、「子供のころの喜び」であった「母の乳房の匂い」をかぐように思うが、一方では、そのようなものは存在しないことを知っている。

断食の苦しみとは、書くことの苦しみである。いや、書けないことの苦しみと言ったほうが正確であろう。思う存分執筆に時間を投入することができるという当初の喜びと、偉大な傑作を生み出すことへの期待が消え、ペンが進まなくなるとき、そして書くことが喜びをもたらさなくなるとき、書くことの意味に疑問を感じ始め、書くことなど必要のなかった子供時代の無邪気さへと退行し始める。「母の乳房の匂い」はそのことをはっきり示しているが、断食を禁じる「父祖たち」もまた、カフカの父親が肯定的な姿で現れている。これらは書くことから逃れたいという欲求が生み出す幻影である。

カフカは1922年1月下旬から、三作目の長編『城』に着手する。7月には退職し年金生活に入ったにもかかわらず執筆は進まず、結局、8月下旬になって書くことをやめてしまう。『探究』を書き始めたのが直後の9月半ばすぎなので、ここでの探究犬の断食の苦しみには、『城』執筆時の苦悶が反映しているだろう。

探究犬の最後の心境は次のようなものである。

最後の希望が、最後の誘惑が消え失せた。私はここでみじめに破滅していけよう。私の研究、子供のように幸福な時代に行った子供らしい実験にいったいどんな意味があるろう。
(474)

ここには、「書くこと」に身を捧げてきた作家としてのカフカの絶望が表現されている。結核をわずらい、死を予感しながら、力をふりしぼって「書くこと」に没頭したにもかかわらず、成果は何も得られない。芸術の面での「未知の糧」、つまり、満足のいく作品を完成させたあかつきに感じられるはずの喜びは与えられない。これまでの自分の人生が無駄だったのではないか、何の意味もなかったのではないかという絶望である。

探究犬は自分を、「寄る辺なく虚無に向かって口をばくばくさせている一匹の犬」(474)にすぎないと感じ、果てしない孤独感に襲われる。

ここにいる私は、(……) 同胞の犬たちみんなから無限に遠く離れているような気がした。

本当は飢えによってではまったくなく、見棄てられたために死んでいくように思われた。誰も私のことなど気にかけてくれないことは明らかなのだから。地下にいる者も、地上にいる者も、高みにいる者も誰一人として。私は彼らの無関心さのために破滅するのだ。彼らの無関心さが言う、「あいつは死ぬ」と。そしてそうなるのだ。(475)

探究犬は徹底的な孤独を感じるのであるが、この孤独には、自分のことを「気にかけてくれない」犬族たちへの恨みのようなものが混在している。ただ、この恨みのような気持ちは、「この孤立を望んだのは私ではなかったか」という自問によってすぐに打ち消される。そして孤絶の目的が語られる。

なるほどそうだ、犬たちよ、しかしそれはここでこんなふう死に死ぬためではなく、この虚偽の世界を脱して真実へと至るためだ。(475)

ここで初めてはっきりと、探究犬が自らの食物探究と断食によって何を求めていたのかが語られている。虚偽を排して真実に達するということが、カフカの文学的営為の目的でもあったことはすでに述べたとおりである。

だが、探究犬が断食の苦しみの中で思うのはこれが最後のことではない。気を失う直前に探究犬は次のような反省を吐露する。

ひょっとしたら真実はまだあまり遠くないところにあるのかもしれない。何もできずに死んでいく私にとってだけ遠すぎるのかもしれない。ひょっとしたらそれはあまり遠くないところにあるのかもしれない。つまり、私は自分が思っているほど見棄てられておらず、他の者たちからではなく、ただ自分自身から、何もできずに死んでいく自分自身からだけ見棄てられているのかもしれない。(475) 7

他の人々が自分を見棄てているのではなく、自分自身が自分を見棄てているために「真実」に到達できないのではないかという疑念が語られている。

探究犬が自分の断食実験に対して当初持っていた絶対的な自信は、最後には徹底的に失われている。そしてそのとき浮かび上がってくるのは他者との関係である。このような探究犬の心境は、『探究』執筆前のカフカの心境と合致する。「書くこと」と他者との関係についてカフカがどう見ていたのかを振り返ってみよう。

次の一節は、『探究』を書く1年前の1921年10月25日の日記の記述である。

僕はつまり、いつも(社交生活を——引用者注)拒絶した。おそらく全般的な弱さから、特に意志の弱さから。このことがようやくわかったのはかなり後になってからのことだ。以前はこの拒絶を、たいていはよい徴候と見なしていた(自分にかけて大ざっぱで大きな希望に誘惑されてのことだ)。今では、こんな好意的な見方はかけらが残っているにすぎない。⁸⁾

自分が社交生活を拒絶してきたのは、「自分にかけて大ざっぱで大きな希望に誘惑され」たた

めであるとされている。「自分にかけて大ざっぱで大きな希望」とは自分の文学的能力への自信からくる成功への期待のことである。そして、「今では、こんな好意的な見方はかけらが残っているにすぎない」と自嘲している。

『探究』を書く直前の、1922年7月5日付けのプロート宛の手紙では、「書くこと」が次のように断罪される。

そして、その(=書くことの)悪魔的なところ(das Teuflische)はとても明確であるように思われる。それは虚栄心(Eitelkeit)と享楽欲(Genußsucht)だ。それは絶えず自分の姿や、また未知の姿の周りを——そのときは動きは多様化し、虚栄心の太陽系が生まれる——ぶんぶん飛び、それらの姿を楽しんでいるのだ。(……)そういう作家は死に(あるいは生きておらず)、絶えず自分自身のことと泣いている。⁹⁾

「書くこと」は「虚栄心(Eitelkeit)と享楽欲(Genußsucht)」であるとされる。自分や周囲の人々を架空の世界に配置し、それを楽しんでいるにすぎない、「書くこと」で自分自身に感動して涙を流しているにすぎないという。この手紙は「書くこと」を全面的に否定するものではないが、「私は文学以外のいかなるものでもなく、他のいかなるものにもなれないし、またなりたくもない¹⁰⁾」と記すほど文学と一体化していたかつてのカフカの発言とは思えない言葉である。

「書くこと」に対して距離を取ることと、他者との関係を見なおすこととは軌を一にしている。次は、『探究』を書くほぼ半年前の1922年1月29日のカフカの日記の記述である。

それに、僕がこんなふうに見棄てられている(verlassen)のはここだけではなく、そもそも僕の「故郷」であるプラハにおいてもそうなのだ。しかも、人々から見棄てられているのではなく(……)、人々との関係において僕自身から、人々との関係において僕の方から見棄てられているのだ。¹¹⁾

周囲の人々が問題なのではなく、自分自身が、そして自分の力が自分を見棄てているために人々との関係が阻害されていると述べられている。これは気を失う前の探究犬の最後の思いと一致している。カフカは共同体や社交生活から遠ざかり、「書くこと」だけに没頭してきたことを反省しているのである。

ここに『断食芸人』との大きな相違点がある。断食芸人は、あくまで「未知の糧」を求めて断食を続けていくことが自分の進むべき道であることを悟って死んでいく。カフカは『断食芸人』においては、たとえ周囲の人々から完全に忘れられたとしても、あくまで自分の「真実」を求めて「書くこと」を続けていくことを自分の生き方とすることを確認している。ところが、『探究』は、「虚偽の世界を脱して真実へと至る」ためにあくまで孤立して断食を続けることを探究犬が確信して終わるといふふうにはなっていない。このような孤立に対する疑念が生じているのである。

「書くこと」を「虚栄心と享楽欲」であると述べたプロート宛の手紙の続きは次のようになっている。

生きるために必要なのはただ、自己享楽 (Selbstgenuß) を断念することだけだ。家を賛嘆してみたり、花輪で飾ってみたりせずに、その中に入って住むことだ。¹²⁾

「自己享楽」である「書くこと」を断念して、さっさと「生」という「家」に入って実際に暮らしてみること、必要なのはそれだけだという。だが、このような結論をもたらしたのは何なのか。それを次に見ていこう。

注

- 1) 『変身』で使われている語。Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt a. M. 1994, S. 185.
- 2) Ebd., S. 349.
- 3) 1920年8月26日付けのミレナ宛手紙。Kafka, Franz: *Briefe an Milena*. Hrsg. v. Jürgen Born u. Michael Müller, Frankfurt a. M.: Fischer 2011, S. 229.
- 4) T 34.
- 5) T 51.
- 6) 拙論『『断食芸人』——書く人として生きる——』(上江憲治・野口広明編著『カフカ後期作品論集』同学社, 2016, 77-108頁)の100頁および注45を参照のこと。
- 7) この箇所は、遺稿であるためか、表現が重複している。プロートもそれを感じたのだろう、彼が編集したカフカ全集では、「ひょっとしたら真実はあまり遠くないところにあるのかもしれない。つまり、私は自分が思っているほど見棄てられておらず、他の者たちからではなく、ただ自分自身から、何もできずに死んでいく自分自身からだけ見棄てられているのかもしれない」と修正されている。(Kafka, Franz: *Gesammelte Werke. Beschreibung eines Kampfes. Novellen, Skizzen, Aphorismen aus dem Nachlaß*. Hrsg. v. Max Brod, S. Fischer Verlag 1980, S. 211)
- 8) T 871.
- 9) Franz Kafka: *Briefe 1902-1924*, Fischer Taschenbuch Verlag, 384f.
- 10) T 579.
- 11) T 895. Binder, a. a. O., S. 293 参照。
- 12) Franz Kafka: *Briefe 1902-1924*, a. a. O., S. 385.

Kafkas *Forschungen eines Hundes* (3)

— Hungerexperiment —

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

Aus Kafkas Lebensumständen und Hinweisen in Briefen und Tagebüchern wird es deutlich: Der zielstrebig in einem abseitigen Gebüsch fastende Forscherhund ist niemand anders als Kafka selbst, der im Schreiben Erfüllung findet. Wenn den Hund am Ende des Hungerexperiments aber Zweifel an seiner bisherigen Lebensweise überkommen, ist das selbstkritisch gemeint: Kafka stellt die Selbstversunkenheit in seine schriftstellerische Passion ebenso in Frage wie die damit verbundene Abkehr von der Welt.

【Key words】 Schreiben, Hungerkünstler, Wahrheit, Selbstgenuß